

伊勢神宮崇敬会だより

みもすそ

特集
和傘

お伊勢さんの歳時記

10月1日 神御衣奉織始祭

御酒殿祭

5日 御塩殿祭

13日 神御衣奉織鎮謝祭

14日 神御衣祭

15日、25日 神嘗祭

31日 大祓

11月5日 倭姫宮秋の例大祭

30日 大祓

12月1日 御酒殿祭

15日、25日 月次祭

28日 大麻曆奉製終了祭

31日 大祓

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすそがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による揮書。表紙は、岐阜市の坂井田永吉本店が製造する和傘。

第92号
令和元年 秋



神宮の雨儀で用いられる和傘。一般的な和傘は竹柄（ちくえ）だが、神宮は木柄（もくえ）。

JR 岐阜駅の南側に位置する岐阜市加納地区。中山道の宿場町、加納藩の城下町として発展してきた同地区で、和傘作りが盛んになったのは宝暦年代（一七六〇年代頃）から。財政の窮乏を案じた藩主が、年貢米の不足を補うために生産を奨励。それにより武士と町民の分業制が確立されたといえます。

長良川をはじめとする木曾三川流域には、和傘の材料になる良質な真竹が豊富にあり、美濃和紙や柿渋、えごま油などの材料が入手しやすかったことも地場産業の成長を後押ししました。

最盛期の昭和二五年（一九五〇）には六百軒もの製造業者によって、年間千二百万本が生産されていました。三十年代に入ると舶来品で高価だった洋傘が国内でも作られるようになり、手間のかかる和傘の生産量は激減します。色とりどりの和傘を天日干しする加納の原風景は貴重なものとなってしまいました。

伝統の地で、今も和傘を製造し続けている数少ない一軒が『坂井田永吉本店』

江戸時代に藩主が奨励

なお雨儀（雨の日の祭典）には和傘が用いられます。

竹と和紙から成る和傘には、身近な自然から材料を得て、改良を重ねながら道具としての洗練を究めてきた先人たちの知恵や工夫が込められています。

今号では、日本一の産地・岐阜県の和傘作りをご紹介します。

童謡「あめふり」に出てくる蛇の目は、和傘の一種。大ぶりで飾り気のない番傘は男性好み、細身で軽量な蛇の目傘は女性が好んで使用してきました。

ナイロン生地 of 洋傘や、安価なビニール傘が登場して以来、和傘を日常的に見ることはなくなりましたが、神宮では今

あめあめ ふれふれ かあさんが
じゃのめで おむかえ うれしいな：



和傘

特集

蛇の目、番傘、日傘、野点用：
竹と和紙で作られる和傘はかつては全国に産地がありました。現在は岐阜県が国内シェア九割で日本一。職人の高齢化が進む中若い女性の活躍に期待がかかります。

日傘で40本、雨傘では46本。傘は骨が多いほど手間がかかる。



輪切りにされたエゴノキがろくろになっていく過程。



ろくろ師の長屋一男さん。日本にたった一人の専門職だ。

ろくろを削り出す



骨を束ねるろくろは、頭と手元のふたつで一組。番傘や蛇の目傘、さしかけなど用途により様々な大きさがある。材料のエゴノキは樹齢15~16年くらいが頃合いの太さ。中央に柄竹を通す穴を開け、外周に骨を納めるスリットと、糸を通す穴を斜めに入れる。



材料となる真竹と、割かれて節に穴が開けられた骨。



1本の竹からつくられた骨をユニットに組んで天日に干す。

竹を割き骨をつくる



辻信夫さんは骨屋の4代目。小骨（支える部分）の寸法にカットした竹筒に、目印となる線を刻みつけてから薄く分割し、節に糸を通す穴を開ける。同じ竹から割いた骨を順番に配せば、傘を畳んだ時に元の竹の通りびったり納まる道理。材料の真竹は流水だと「性（しょう）が抜ける」ため、溜め池に浸しておく。

です。当主の阪井田永治さん（63）は三代目。大阪で修業した祖父が帰郷して創業し、日傘の考案により家業を大きくされました。

「かつては全国に和傘屋があり、地域の気候風土に則した形状のものが作られていました。たとえば日本海側の金沢では雪や冬風に耐えられるような頑強さが、京都では舞妓芸妓さんたちのために華やかなものが作られてきました」

長良川の豊かな流れは、和傘の材料を上流から下流へ運ぶだけでなく、完成品を桑名港まで運び、そこから江戸や大坂へ流通させる役目も担いました。

「地元では加納傘、京都や江戸では美濃傘と呼ばれました。岐阜の傘は細くて優雅な蛇の目が主流だったので、京都では特に喜ばれたようです」

全工程は百以上

和傘は構造がとても複雑です。製造工程は大きく分けて九つ、全工程は百を越え、細かく分業されています。

一本の真竹から数十本の骨を削り出す「骨屋」、骨組みの支えとなる部品を作る「ろくろ屋」、柄竹にはじき、ろくろを付ける「練込屋」、和紙を張る「張屋」……一本の和傘が完成するまでには十数人の職人の手を経ねばならず、六十日から九十日を要します。

阪井田さんは、そうした分業を指揮・統率する役目を果たします。阪井田さんが頼みにしている腕利き職人さんを訪ねました。

骨屋の辻信夫さん（84）は、この道六十年以上。秋から冬の間に伐ってきた真竹を水に浸けて湿らせ、表皮を小刀でむいてから八等分にカットし、さらにそれを薄く等分割し、傘骨を作ります。骨には、傘を閉じたときに元の形になるよう目印（斜線）を刻んでおきます。順番を違えないようにセットを組み、糸穴を機械でうがえます。

「ここらでは農家が農作業の合間にする仕事だった」と辻さん。それが今では県内でたった三人にまで減ってしまったそうです。

続けてお伺いしたのは「長屋木工所」。代表・長屋一男さん（69）の名刺には「和傘轆轤・練り込み」とあります。

「ろくろが専門ですが、練込屋が廃業したので仕事が一増えました。ろくろにする材は、粘りがあって加工しやすいエゴノキ。伊勢ではチシャノキと呼ぶようです。昔は郡上や飛騨からたくさんとれたのですが、最近は山から木を出す人がいないので、ボランティアの力を借りて搬出してもらっています」

ろくろは、傘骨をまとめ、柄竹（柱）とつなぐ重要な部品。頭ろくろと手元ろくろの二つ一組です。

「岐阜は国産和傘の九割を生産していますが、ろくろ師は全国でも長屋さんおひとり。この方に何かあったら、国内から和傘が消えてしまいます」と阪井田さん。

長屋さんも、県を越えた全国組織の後継者育成が急務と語ります。



和紙を張るのは「張屋」の仕事。最も広い部分に相当する平紙は、扇形にカット(右)。親骨と小骨を糸でつなぐ(左)。

坂井田永吉本店の三代目・坂井田永治さん。和傘のプロデュースと仕上げ、卸が主。



刷毛で糊を置き、最初に軒紙をまわしてから、円を4等分した扇形の和紙を4枚張っていく。

紙を張り仕上げる



1/天上張り…小骨が集中する天部は、専用の道具で奥まで密着させてから、頂部に和紙を何重にも巻き重ねる。糊は、以前はわらび糊、現在はタピオカ糊が用いられる。
2/うるしを塗ったろくろと小骨をかがり糸でつなぐ。
3/碇子(がいし)に挟んでしごき、表面を滑らかにする。
4/仕上げに油をひき撥水性を高める。



和傘の天日干しは、戦後まもなくまでは加納地区ではよく見られた風景。



長良川畔の『長良川てしごと町家CASA』では、貴重な美濃傘を展示販売している。岐阜県岐阜市湊町29

かつては伊勢にも山田傘が

和傘は唐傘とも呼ぶように、中国から伝わりました。当時は開閉できない天蓋でしたが、室町時代に開け閉めができる傘が発明され、和紙に油を塗って防水加工した雨傘が普及しました。

洋傘と比べて骨の形が数倍もあり、張った紙を内側にたたみこむ和傘は、開けば花、閉じれば竹」といわれ、竹林の中に育っている真竹の凍と立つさまが理想とされてきました。

「開けば花」は、美しい和紙の色・柄だけではありません。数十本もの骨に糸が緻密に織り込まれた内側も注目に値します。かがり糸は本来、傘が開きすぎな

いよう傘骨の補強をするもの。けれど実は傘をさす人に、糸の華やかさで楽しい気持ちになってほしい、との願いも込められているのだとか。

優美な蛇の目傘を生み出した岐阜県では、伝統を受け継ぎ新たな和傘を手がける若い女性職人が活躍を始めています。

「おひとりには、かつて坂井田商店さんに勤務されていた方。丁寧な仕事ぶりという優れた美的感覚で、日傘は特に人気です」

そう語るのは、産地に初めてオープンした和傘のアンテナショップ『長良川てしごと町家CASA』の担当者。日傘は、雨傘より工程が少ないことから価格が求めやすく、ファッションアイテムとして都会で注目され始めているそうです。提灯、扇子、団扇、そして和傘。日本

人は竹と和紙を組み合わせて、いろいろな民具を生み出してきました。それらは各地で当たり前前に作られていたのです。

神宮の和傘もかつてはお膝元の伊勢で作られ、山田傘と呼ばれていました。古い和傘を開くと、伊勢河崎という文字が確かめられます。

雨の多い日本では、傘は必需品でした。「弁当忘れても傘を忘れるな」とは、山陰や北陸、三重県では尾鷲など多雨地帯では今も使う慣用語です。

歌舞伎や舞踊といった日本文化を支え、雨の日を楽しみにさせてくれる美しい雨具、和傘。神宮参道で雨儀の祭列に出会ったら、神職たちが手にする和傘の美しさにも着目してください。